

一走衆御笠之事右如申候近年儀也御異體時は御小者參候御參宮などの御時御裝束にて御宮めぐりの時は走衆被參候由ニ候惠林院殿様阿州玄やうかくじ御動座の時雨ふり候て各御笠指可申由被仰出候各存分候つれ共御門出之事ニ候間無左右被參候て八幡にて如此子細被申入候被聞召分如先々たるべき旨被仰出候つる由今の小坂殿親父など慥物語之由候飯川能登殿順職も御物語候略○中

一笠さす事雨ふり候へば御輿ぎはの人に被仰出候事も有又各さし候へと可申かと伺申時もありさてさし候を見て御供衆もさ、れ候つるとて候

〔宗五大草紙下〕からかさの事

からかさのほねをぬりたるは人の内衆はさすべからず小者はくるしからず

公方様御成の様體の事

一雨ふり候時御こしにゆたんかけられ候事は公方様御輿には見及不申候御旅にて一段雨降風吹候へば懸られ候由候さ候へば御供衆も蓑をめし候御こしにゆたんかけられ候はねば御供衆もかさを御さし候はず御臺様の御こしにはいづくにてもゆたんか、り候御車の時は御ゆたんか、らぬ程は御供衆もかさを御さし候はず候

〔奉公覺悟之事〕一馬上にて傘左にてさすべし目通りにえを持べき也

〔貞順故實聞書條々三〕一笠をさす時分の事卯月朔日か八月中さし候九月いるまでもさし候時節によるべく候

〔空穂物語樓の上上の上〕たなばたまつりかなたこなたとせさせ給へり略○中よひすこし過るほどに源中納言かりのよそひにてむまにておはしてみなみの山ひさかきのとにおはしておましをかかせてからかさかの木のうつばにをきたまふ